

ことに存する。また自分のアイデンティティを確立するのに役立つであろう。また日本の長所と短所を理解するのに役立つ、一層日本への愛が深まるであろう。

愛知大学は、イギリス、アメリカ、中国、ドイツ、フランス、韓国、オーストラリアと海外短期語学セミナーの取り決めをしているので、夏休み或いは春休みに、大学からの手配で安全に外国へ出かけて勉強をして単位を取ることができる。これは大変有り難い制度である。確かに費用がかかるが、このためにアルバイトをすることは大いに薦められることである。

筆者も何度か外国へ旅行して来た。一人の時もあれば団体の時もあった。若いときは体力があるので、少々無茶をしても心身には余裕がある。冒険をしてみることが大切である。筆者が、イギリスの湖水地方へ一人旅をしたのは約25年前であった。初めて接するどの人もたいていは親切であった。修士論文はワーズワスについて書いたので、彼の詩に詠われていて有名な水仙を見たくて、アルズウオーター湖方面まで一人で行ったのだが、どの辺りに水仙があるのかは分からなかった（誰にもその場所は分からないらしい）。一人で何キロも歩き回って夕方になり、暗くなったので心細くなりながらもバス停まで約2時間、農地の間の細い道を歩いたものだった。辺りには誰一人としていなかった。全くのひとりぼっちであった。しかしバス停まで到着してみるとすでに最終バスは出てしまっており、ヤムなく近くのウィンダミア湖畔のホテルに泊まったのだった。このような思い出は今では貴重なものになっている。遅しさを身につけることができたのだから。

初めてイギリスへ行ったのはそれよりも約十年前のことであった。これは団体旅行で出かけたのだが、イギリスへ到着したときの感激は忘れられない。まだ海外旅行が珍しいときであったから。初めてイギリスへ行って帰国したとき、是非またイギリスへ行きたい、と思った。そしてこの思いは実現したのであった。

『『未知』への旅』ということで人間や場所と

の新たな出会いについて少しばかり述べて来た。海外旅行について述べたが、遠い所へ出掛けなくても日本の身近かなところでも新たな出会いはいくらでもある。行きたくても諸事情によって外国へ行けない人もいるであろう。しかしがっかりする必要はない。つまりは、勇気を出して今まで知らなかった人々と、また読んだことがなかった本と、出かけたことがなかった所と接することが大切なのである。

イギリスで1年間暮らして 思ったこと

法学部
多田 哲也

昨年度2004年4月から2005年3月まで、海外研修でイギリスのオックスフォード大学で研究する機会を与えられた。実際にイギリスという国に一年間住むことで、色々気づいたこと、考えさせられたことを、この場を借りて記してみたいと思う。

まず最近のイギリス人の子供に対するしつけや態度について思ったこと。私の今回のイギリス滞在の場合、8歳から1歳までの小さい子供たちをともなっていたせいで、小学校その他の場所で、同じぐらいの年齢のイギリス人の親子と接する機会が多かった。それで彼らの子育てぶりについて観察する機会も多かったわけだが、正直な感想として、最近のイギリス人の若い親たちは、しつけなどについてかなり甘くなっているんじゃないかな、と感じることが多く、私個人としては、

かなり意外な感じがした。というのも、今回の渡英前から、イギリスの文化、生活などについての本はかなりあれこれと読んだが、大抵の日本人によって書かれた本では、「イギリス人は犬には優しいが子供には厳しい」とか「日本人の親たちのように、子供が騒いで他人に迷惑をかけても放っておくような親はイギリス人はいない」といったことが異口同音にいわれており、とにかくイギリス人は日本人などに比べれば、子供のしつけには厳しいんだ、と思いつ込んでいたからである。そのこともあって、うちでは渡英前に、子供たちには「イギリスに行ったらお行儀よくしていないといけないよ。日本みたいにまわりの大人は子供に甘くないからね。」ということをさんざん言い聞かせていたのであるが、実際には日本と同様、子供が騒いでまわりに迷惑をかけても放っておいている親たちを見る機会も多く、それほど日本と違うという印象はなかった。またおもちゃやゲームなどについても、日本と同様にかなり高価なものでも、子供からいわれるままに買い与えている甘い親が多いような印象を受けた。そしてこういった最近の傾向は、イギリス人たち自身もよく自覚しているらしく、年配の人たちなどはかなり批判的である。何人かの「おばあちゃん」と呼んでもいいような世代の女性たちの口からは、こういう最近のイギリスの傾向に対して、「嘆かわしい」と言う声を聞いた。他の国については詳しくは分からないので断言は出来ないが、やはり少子化その他の要因によって、現代社会では子供のしつけは甘くなるというのは、いわゆる先進国に共通した流れなのかもしれない。

またこういうこともあった。イギリスには独特の「パブ」といわれる飲み屋があるということは、日本でもよく知られるようになってきている。このパブについても、大抵の日本人による観光ガイドブックなどでは、子供は立ち入り禁止だと言いつたのであるのだが、私の家族が行ったことのあるいくつかのパブでは、どこでも子連れOKであった。これがロンドンのオフィス街のパブなどであれば、違ったかもしれないが、少なくとも私たち家族が

住んでいたオックスフォードやいくつかの田舎町のパブなどでは、子連れでもなんの差し支えもないようであった。もしかしたら時間帯のことなどが関係していたのかもしれないが（例えば夜だったらだめだったが、昼間だったので大丈夫だった、とか）、これも「子供に厳しいイギリス」という私が持っていた先入観からすれば、非常に意外な感じがした。他にも同じようなことを感じるものがいくつかあり、とにかく私の印象では、社会全体も子供という存在に対して、甘いというか、とにかく寛容になっている感じがした。

それについて思い出したのが、吉田健一（1912 - 77、吉田茂の息子であり、滞英経験の長い英国通として知られる評論家）のエッセイで次のように言われていることである。

英国というのは不思議な国で、何かのことでどこまで無関心でいられるだろうと思っていると、或る時期になって俄かに態度を改めてそれを実行に移す。たとえば十六世紀あたりから・・・英国での動物虐待には目を蔽わせるものがあって、そうして動物を虐待するのが大衆が愛好する公認の見世物の一つにさえなっていた。それが十九世紀になって動物は保護すべきものという方向に英国人の考え方が変わり、これが急速に立法その他の措置が取られる結果になって、今では英国のように動物が完全な形で保護されている国はまずないと言える。かつては奴隷貿易が大きな収入になっていた英国が、奴隷制度の廃止を決定したのみならず、その海軍力を行使して世界的にこの貿易を絶滅したのも別な例である。（吉田健一「英国昨今」、『英国に就いて』筑摩書房、1974年）

だからもしかしたら、動物や奴隷のように、今までとにかく厳しく扱い冷遇していた「子供」という存在に対して、イギリス人は現在急速に態度を改め、保護すべきものとして扱いつつあるのかもしれない、と思ったりもした。

他にもついでにもう少し子供に関係のある話を

続けさせてもらおうと、これは割合よく知られるようになってきていることだが、「ポケモン」を代表とする日本発の子供文化の、イギリスにおける浸透ぶりにも驚かされた。他にも「バインブレッド」、「何タレンジャー・シリーズ」や「たまごっち」などが、イギリスの子供たちの間で人気があった。特に「たまごっち」は、ちょうど帰国する直前のころ、うちの子供が行っていた小学校でも大人気で、かなりの数のクラスメートが学校に持ってきて、ひまさえあればそれで遊んでいるようだった。また他にも日本発ということで言えば、公文式の教室（そのままKUMONと呼ばれている）もうちの家と同じ通りにある教会のホールを借りてやっていたり、バスの車体に大きな広告を載せていたりして、かなり手広くやっているようだった。イギリス人たちからすれば、日本という国は、娯楽でも教育でもとにかく子供に対して手間ひまをかける親の多い国として知られているようで（実際イギリスで出版されている世界の地理についての本などでは、日本人は非常に教育熱心な人たちである、と言われていた）、そういった国の文化が、今現在のイギリスでも進行中の、少子化にともなう「一点豪華主義」の子育ての方向に合致しているのだらうと思ったりした。

* * *

話は変わるが、オックスフォード大学の中で私が所属していたチャンピオン・ホールは、非常に国際的なコレッジで、色々な国からの留学生が来ていた。その中でポーランド人の研究者から聞いた話が興味深かった。彼は留学期間を終えた後は、母国のポーランドに帰って大学で教えることになるが、受け持ついくつかの講義のうち、半分は英語で、半分はポーランド語でやることになるだろうというのである。なぜ半分も英語でやるかということ、そのほうが学生に人気があるからだそうだ。つまり講義も英語でやってもらうことで、できるだけ英語に接して自分の英語の能力を高めたいという気分が、学生たちの間で非

常に強いということらしい。彼に言わせれば、ポーランドだけではなく、他の東欧の国々やスウェーデンなど北欧の国々でも、講義をしたり論文を書いたりすることについてはできるだけ英語で、という具合に、共通言語としての英語への一極集中化が、ヨーロッパではこれまで以上に急速に進んでいるという。またインドなどは、イギリスの旧植民地としての歴史的背景などもあり、今までも常に英語教育が盛んであったわけだが、チャンピオン・ホールにいたインドからの留学生の話では、ここでも最近では、これまで以上に英語の重要性が強調されていて、英語の学習をスタートする年齢を今よりさらに引き下げて、より高度な英語能力を持った人材の育成を政府が考えている、とのことだった。こういった話を世界のあちこちからの留学生から聞くにつけても、それがいいことか悪いことかは別としても、とにかく世界的にコミュニケーションの手段が、英語へとますます収斂されていっていることを肌で感じさせられた。

こうした世界の流れに対し、日本でも小学校からの英語教育に向けた動きなどもあるが、実際には日本では、こういった「使える英語を身につけるために、出来るだけ早い時期に英語教育を！」という要望は、子供の親たちからのものが主で、いわゆる「知識人」たちからは、「いや、それよりも母語としての日本語教育の充実を」といった言い方による批判的な意見を聞くことが多いようである。（私の考えでは、別に英語教育と日本語教育を、二者択一のものとして対立させる必要は無いように思うのだが。）これまでは確かに、そういった知識人たちの言うように「日本はそういった英語を使わざるを得ない国々とは事情が違うから、日本人の場合は、実用的な英語はできないままでもいいんだ」ということが、ある程度妥当な意見として通用してきたわけだが、今後の世界情勢においても、日本はこの考えでずっとやっていけるものかどうか、非常に興味深いところである。